
儀式の夜

白亜零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儀式の夜

【Nコード】

N8089X

【作者名】

白亜零

【あらすじ】

ある高校に通っている、女子高生の黒輝禮夜。いつもの様に退屈な日々を過ごしていた。

しかし、ある日を境にして起きる殺人事件。これからどうなってしまうのか…

01（前書き）

初めまして。

初めて書く小説なので、誤字なども多いかもしれませんが、読んでくれると幸いです。

予定が狂わない限り、土曜日に更新します。

曇っていた。

今にも雨が降り出しそうな梅雨空を黒輝^{くろきゆきや}禮夜は眺めていた。名前でよく勘違いされるが、一応女だ。

正直言つて、つまらない。何もかも。高校生活も思ったより楽しくなかった。今行っている授業の物理は特におもしろくない。

この先生の授業は長いし同じことを何回も繰り返して説明する。しかも生徒いじめをすることで校内の生徒の中で有名だ。かなりたちの悪い奴と言える。

こいつの名前は悪谷^{あくたに}。勿論、生徒たちには嫌われている。

正直言つて、眠い。今すぐにでも眠れる。

でも、こいつの授業じゃ眠れない。理由は…

「おい！そこで寝ているのはだれだ！河崎か！河崎、お前この問題解いてみる！」

「え！えつ…と…」

…まあこういうことになるからだ。ちなみに河崎のフルネームは河崎^{わさき}伸太である。

「もう、いい！後で職員室に來い！！じゃあ黒輝、お前答えてみる！」

こつちに矛先が回ってきた。ぼけーつとしていたからだだろうか。とりあえず立つ。しかし問題なんて聞いて無い。黒板にも書いていない。どうやら悪谷が消いたらしい。この野郎。

禮夜は心の中で悪谷に悪態をついた。しかし今はそれどころではな

い。こいつの問題には答えないと評定を下げられるのだ。そのため問題には答えないとやばい。でも聞いて無かったから答えられない。この場合はどうすればよいのだろう？

不意に目の前がブラックアウトする。でも一瞬のことだった。

「…正解だ。座ってよし。」

心底悔しそうにしながら次のページに入る。周りの生徒のささやかな歓声が聞こえる。

何が起こったのか意味が分からないものの、言われたとおりに座る。結局その授業で謎が解けることは無かった。

待ちに待った放課後。いつもならもっと喜べるはずなのになんとなく喜べない。テンションがいつも上がらない。

「ちょっと禮夜、さっきの授業のときすごかったね。かつこよかったよ。」

そう話しかけてきたのは長瀬由梨ながせゆりだった。さっき…つまり意識が無くなった時の授業だろう。

「ごめん、由梨。ボクその時のこと覚えてないんだ。というかあの時にボクは何をしたの？」

「はあ？あんた覚えてないの？信じられない。本当に何も？あんた私をはめようとしてる訳じゃないよね？」

「うん。というかどれだけ疑うのさ。」

禮夜がそういうと、由梨は溜息をつきながら簡単に話し始めた。

「そりや疑うよ。…まあいつか。教えてあげる。本当信じられないよ、禮夜、あんた悪谷に当てられたでしょ？最初はあんた戸惑ってたみたいに見えたんだけど、途中から…何て言うのかな…そう、急に自信满满になった感じっていうか…まあそこはいいや。その後、その消された問題の答えを言ったんだけど…その問題が大学生レベルの問題だったらいいんだよね。だからみんなおーって感じで…まあそんなところ。」

「つまりボクが大学生レベルの問題をあの授業で答えたと。」

「簡潔に言うとな…てか私がかんばって言ったことをそんな簡単にまとめないでほしいんだけど？なんかみじめでしょ。あ、それとね、今ほかの学校の女の子が行方不明らしくて……」

由梨の言葉を見無視する。別にまとめようがまとめ無かろうが由梨に関係する事じゃない。それにそんなことは、まったくもって問題じゃない。

問題なのは意識が無い間にあの問題を解いたこと、そしてその記憶が全くないこと。これはどういうことなのだろうか？

しかしどうせ禮夜にとっては得となることだったのだから、別にそこまで気にすることでもない。

「まあ、いつかあ。」

「全然良くない!!」

「何が？」

「全て！」

由梨が勝手に怒っているのを禮夜は眺めていた。何がしたいのだろうか？怒ることによって、何が変わるのだろうか？

禮夜は思考を止めると荷物をまとめて立ち上がった。それに合わせて黒く長い髪の毛がかるく揺れる。

「禮夜？あんた何してんの？」

「帰る。」

「はあ！？あんた何勝手に帰ろうとしてんの！？」

またしても由梨を無視して廊下に出る。昇降口まで響いていた由梨の声は聞かなかったことにしておいた。

禮夜は家に帰る道を歩いていた。禮夜の家はこの辺ではめずらしい和風の家である。何でも昔はこのあたりの大地主だったらしい。しかし、それも昔の話だ。

「ただいま。」

返事は無い。当たり前だろう。

両親はある事件に巻き込まれ、七年前に他界し、ここまで育てくれた祖父も去年他界した。

そのためこの家には禮夜一人しか住んでいない。

…一人と言うのとは違うが。一応何人かの使用人が住んでいる。し

かし今は休養をとらせている。

今日は何もかもがめんどくさい。すぐに部屋に戻り、着替え、布団に入った。

結局あの授業の時に何が起きたのだろうか。

思考が始めるがすぐに中断する。

眠い。

そこから禮夜の記憶は無くなった。

02（前書き）

現実逃避をするために投稿しました。

次の土曜日にも多分更新すると思います。

ふと気がつくと、部屋の中が明るかった。いつの間にか眠ってしまったらしい。

時計を見ると六時三十分、朝が苦手な禮夜にしては早い。もうひと眠りしようと思ったが、完全に目が冴えてしまっていて、眠れない。音楽でも聞いて時間を潰そうかと思ったが、充電が切れていた。昨日充電をするのを忘れていた。

しょうがなくテレビを見ていたが、面白い番組は無かった。

時計を見る。今は七時。さっきから三十分しか経っていない。

仕方がないので、ジャージからセーラー服に着替え、学校の用意をし、家を出た。

外は明るかった。

禮夜はあてもなく外を歩いてみる。

「何で一人の時にこんなに早く目が覚めるんだよ……今日は八時くらいに起きるつもりだったのに。」

禮夜は朝に弱い。そのため七時半以降に起きるのは、最早日課となっている。

なんとなく歩いていると、いつのまにか、学校の裏山に来ていた。高校に裏山があるというのも変な話だが。

いつもは見ているだけだったが、今日はちょっと探検しようと思つて中に入った。

裏山に広がっている森林は思っていたよりも広く、まるで何かを追悼しているような感じだった。膨大な数の何かを。

森林を進むと、奥に洞窟があった。覗いてみると、大人が五、六人くらいは入れそうだった。何故こんなところに洞窟があるのだろうか？何かに使ったのだろうか？

そういえばこの辺は戦争の時の防空壕がどこに残っていると噂で聞いたことがある。その残骸なのだろうか？

まさかこの山自体が戦争の産物だというのだろうか？

もしも思っている通りだったらこの学校は何故こんなところに建てられたのだろうか？

不意に後ろから物音がする。

驚いて振り向くが、そこには何もいなかった。探りたい気持ちもあったが、ちょうど登校の時間になってしまっている。

少し恨めしく思いながらも禮夜は裏山を後にした。

登校して数分後、河崎が話しかけてきた。

「ちょっと今時間あるか？」

「あるけど。」

「じゃあちよつと来い。」

何だろうと思いつながら河崎についていった。

しかし、ついていく最中、何故だか不穏な空気がした。何か悪いことが起きる…そう直感したのだ。理屈は無い。ただの思い違い、そう思いたかった。

考え事をしながら歩いていると、河崎の歩みが止まった。そこは、裏山の前だった。

「お前、朝ここにいただろ。」

何故河崎がそのことを知っているのかは分からないが、不審に思いながらも質問に答える。

「いたけど。」

「じゃあその近辺に洞窟があつたか？」

「あつたけど。それが……」

どうかしたのか？と続けようとした時、いきなり河崎に殴られる。口の中で血の味がする。殴られたときに切ってしまったらしい。

「何だよ、いきなり……」

河崎はこつちを睨みながら言った。

「ここにくんな。」

「は？」

「ここはお前が来ていい場所じゃねえんだよ！」

河崎は「いいか、絶対近づくんじゃねえよ。」と言いながら帰って行った。

禮夜はさっき見たものを思い出しながら、河崎のさっきまでいた場

所を見ていた。

禮夜は時計を見る。

授業開始まであと五分。今から行かないと間に合わないだろう。しかし、禮夜は時間という概念に縛られることはない。

禮夜はためらわず、裏山に入った。

03（前書き）

このところ、朝寒いですね。布団から出たくなりません。

朝に行った洞窟まで行く。さっきと同じ道…一本しかない道を通る。この道を外れれば、ここから出るのは至難の業となるだろう。

朝に来た洞窟につく。洞窟の後ろからは同じように物音がする。何かが動いている音だった。人間でなければいいのだが。

しかし禮夜の嫌な予想は對外当たってしまう。今回もその通りだった。

物音のした場所、そこには制服を着た女子生徒がいた。と言っても鎖で身体を地面に繋がれていて、目と口には布が巻かれているが。禮夜は素早く布を外す。

「ちょっとじつとしていて。」

禮夜は制服を漁る。スカートのポケットに、小刀が入っていた。禮夜はそれを取り出すと、日本刀のように使って、鎖を切ってしまった。普通、小刀で鎖は切れない。でも禮夜は剣の達人である。小刀で鎖を切ることなど簡単だ。

女生徒を解放する。ブレザー型の制服。禮夜の通っている高校の生徒ではないらしい。

「キミ、名前は？」

女生徒は泣いているので答えようとしない。ここで禮夜は質問を変えろ。

「一人で歩ける？」

この質問には泣きながらだが首を縦に振り、立ち上がる。

裏山を出て少女を警察署に預ける。親がすぐに迎えにくるらしい。

警察からの質問は適当に理由をつけて切り上げた。

警察署から出た時には、すでに二時間目の授業が始まっていた。学校に向かいながら考える。

禮夜の直感は当たってしまった。しかし、これだけで終わるとは限らないのだ。もしかしたら何か重大な事件が起こるかもしれない。

しかし禮夜には止める力がない。今はそれが起きないことを祈るばかりなのだ。

そんな風に思いながらも学校へと向かった。

04（前書き）

この頃毎日眠いです。

やっぱり早く寝たほうがいいんですね。

放課後、由梨に話しかけられる。

「ちょっと禮夜、何で今日遅れてきたの？ってちょっとあんた、顔どうしたの！？ちょっと見せて！どうしたのよ、これ。」

最初は答えるのを渋っていたが、あまりに由梨がしつこいので、思わず今朝のことを言ってしまった。

すると、由梨はいきなり立ち上がり机を殴りつけた。机は派手な音を立てる。

教室にいた生徒たちがぎょつとしてこっちを見た。

「河崎め…女子を殴るとは…しかもよりもよって禮夜を…」

「お、おい…由梨…」

「絶対許さん！ぶちのめしてやる！」

由梨は唸るようにいいながら、教室を走って出て行った。多分河崎のところに向かったのだろう。由梨は一見弱そうに見えても、実際は柔道の黒帯を持っている。男子でも柔道で由梨に勝てる者はいない。

止めなければどうなるのだろうか。

一つだけ分かっているのは河崎が大怪我をするということだけだ。ということは、その前に由梨を止めなければならない。

しかし止めるにしても由梨と河崎はどこにいるのだろうか？

そう悩んでいると、急に教室の扉が開いた。そこから入ってきた一人の男子生徒が興奮した様子で言う。

「おい！河崎と長瀬がガチバトルするかもしれないぞ！」

それを聞いて、教室にいた生徒はその男子生徒にどこにいるのかと問いただした。男子生徒が簡潔に校庭と言つと全員我先に、という感じで校庭に走って行つた。こんなに早く騒ぎになるなんて思わなかった。このままでは警察沙汰になってしまう可能性が高い。それほどに今由梨は怒っているのだ。こんなことで。

一刻も早く行かなければ。

それだけ考えて禮夜は窓に駆け寄り、二階の窓から飛び降りた。驚異的な身体能力を生かし、綺麗に下の地面に着地した禮夜は、二人がいるという校庭に向かった。

校庭では由梨が河崎の胸倉をつかみ何か怒鳴っていた。何を言っているのかはここからでは分からないが、二人とも、ひどく興奮しているのは確かだ。

このままでは本当に警察沙汰…傷害事件に発展してしまうかもしれない。そんなことになったら当事者は勿論、この学校まで評判が落ちてしまう。この学校は日本でも有名な名門校なため、そんなことになったらどうなるかは目に見えている。

しかし、そんなことは何も考えていないのか、周りで見ている生徒はおもしろがつているようだった。

ここまで考えて、ふと河崎の右手を見た時、禮夜の顔色が変化した。自分でも青くなっているのが分かる。河崎の右手、そこには…カッターがあつた。ご丁寧にも新しい刃に変わっている。

新しい刃に変わっている。……つまり、もともと誰かを傷つけるつもりだったのだろうか？

しかし今はそんなことはどうでもいい。いつ河崎があれを振り上げ

るか分からないのだ。何より、まだ周りが気付いていない。由梨もだ。あのままでは避けるに避けられないだろう。

禮夜は二人のところに向かって気付かれないようにゆっくりと近づきだした。走ってもよかったが、禮夜に気付いてカッターで由梨が刺されても困る。禮夜が移動している間も二人は言い争いを続けていた。

あと数十メートルのところまで来たとき、河崎が何か言い始めた。

「…うつせえよ。」

「…何？」

「うつせえって言うてんだろ！さつきから黒輝のことばかり言いやがって！うぜえんだよ！」

そう言いながらカッターを由梨に向かって振り上げる河崎。ここで由梨や周りの生徒もカッターの存在に気付き始めた。

由梨はカッターを見て後ずさりした。しかし河崎がその距離を縮める。禮夜はここで走り始めた。

校舎側がさつきから騒がしい。何をしているのだろうか？

「さつきと死ねよ！お前なんかこの世にいらねえんだよ！」

河崎が由梨に向かってカッターを振り上げる。

由梨は逃げようとしたが、河崎のほうが行動は早く、先回りされてしまい、由梨は逃げるができなくなってしまった。

カッターが振り下ろされる。カッターは、ちょうど由梨の首筋：頸動脈に狙いを定めていた。

カッターが由梨の頸動脈を切り裂こうとする寸前、禮夜は間一髪で間に合い、由梨を右手でつかみ、そのままいっしょに地面に倒れた。

とりあえず刺されてはいないらしい。

しかし河崎はまだ由梨に狙いを定めていた。今度は由梨の顔に、もう一度カッターが振り下ろされる。

禮夜は反射的に右腕を由梨の顔の前に出して庇った。

その直後、右腕が熱くなつた。しかしそれもつかの間、鋭い痛みが走る。

河崎が振り下ろしたカッターが禮夜の右腕を貫いていた。

傷口から血が滴り落ち、由梨の頬辺りに落ちる。由梨の頬に落ちたそれは首筋を伝い、地面に落ちた。

禮夜は左手で由梨の手をとり、無理やり立ち上がらせた。このままでは倒れたままになると考えたからだ。

遠巻きに見ていた生徒たちが禮夜の腕から滴り落ちる血に気付き、微かに悲鳴が上げた。

河崎は顔色を変えてよろよろと後ろに後ずさりした後、その場でどさりと音を立てて地面にしりもちをついた。

由梨は顔に落ちた禮夜の血を触った後、カッターが貫いたままの禮夜の右腕をぼんやりと眺めた後に、その場にへたり込んだ。

「……血…血が出てる…早く止血を…」

由梨の声は震えていた。そのためうまく聞き取れない。しかし、ひどく心配しているのだけは分かった。

「大丈夫。」

とりあえず安心させるために明るい声音で言っていると河崎の方を見た。河崎は恐怖の籠った目で禮夜のことを見ていた。まるで化け物を見ているようだ。

「河崎。」

河崎は何も言わなかった。いや、言えなかったという方が正しいの
だろう。

「本気で殺そうとするのはよくないね。でもこれも立派な殺人未遂
だ。まあ傷害事件になっちゃったけどね。」

そう言ったときに後ろから複数の足跡が聞こえた。振り向くと何人
かの生徒と先生が来た。

「ちよつと、貴方達は何をしているの！三人とも職員室に……」

そこまで言ったところで先生が息を呑むのが分かった。いっしょに
いた生徒たちは悲鳴を上げた。全員、禮夜の傷を見ていた。

右腕から滴り落ちた血は、校庭の砂に奇妙な模様を描いていた。そ
の場の砂は赤黒い血によって凝固し、そこだけ赤かった。

「……職員室は結構です。とりあえず黒輝さん、保健室に行きましよ
う。長瀬さんもいっしょに来て下さい。川崎君はとりあえず教室に
戻りなさい。」

禮夜はその言葉に黙って頷くと、由梨に声をかける。

「由梨、行くよ。」

「……」

「由梨！」

それでも由梨は動かずに、禮夜の右腕を見て、がたがたと震えてい

た。禮夜は溜息をついてその場にしゃがんだ。

「由梨、ボクは大丈夫だよ。…一緒に行こう?」

「…」

由梨に左手を差し出すと、由梨は無言でその手を取り、立ち上がった。禮夜は行く直前に校庭を見た。さっきまでのことが嘘のように、そこは静寂に包まれていた。

05（前書き）

本格的に寒くなって来ましたね。地域にもよりますが。

私は寒いのが苦手なのに冬は好きなんですよね。矛盾している気もしますが（笑）

「…さて、黒輝さんの怪我の手当ても終わったし、何があったのか教えてもらえる？」

保健室で手当てが終わった後、禮夜達を保健室に連れてきた横峰羽よこみねは昏ぐれにさっきのことについて質問される。

「……」

禮夜はそこまで話したいことでもなかったため、黙っていた。由梨はさっきから黙ったままだった。ずっと自分の足元だけを見ている。その光景を見て、横峰は溜息について椅子に座りなおした。

「…どっちかが話してくれないと教室に戻れないわよ。」

禮夜は横に座っている由梨を見た。由梨はこっちも見ずに、さっきと同じように、ただ下を見ていた。由梨が話す気配は一向に無い。それを見て禮夜は横峰の方を見て朝に起こったことからさっきの事件のことまで全部話し始めた。

しかしあの山が昔何だったのかは聞かないで置いた。まだ聞くべき時ではないと思ったからである。

全部聞き終えて、横峰はもう一度溜息をついた。

「そう、あの山にね…」

横峰はそれだけ言うと立ち上がり、禮夜達に教室に戻るようにと告げた。

禮夜は立ち上がったが、由梨は立ち上がらなかった。

「由梨。」

声をかけても反応しない。

それを見て横峰は禮夜に声をかけた。

「長瀬さんは少し保健室で休ませましょう。少し時間がたったら私が教室に連れて行くので。」

「分かりました。」

それだけ言って保健室から出ようとすると、横峰が耳打ちをしてきた。

「今日の朝に見たものは誰にも話さないように。考えていることも……もしも私が思っている通りだとしたらあの山について調べなければならぬので。」

それだけ言って、横峰は保健室のドアを閉めた。

禮夜は廊下にある窓から空を見た。今にも雨が降ってきそうな、どんよりと暗い空だった。

帰り道を急ぎながら禮夜は考え事をしていた。あの山のことも、学校のことも、由梨のことも。

結局、由梨は教室に戻ってこなかった。確かに由梨は血が苦手だった。しかしあの反応は今まで見たことが無かった。

まるで昔、何かあったかのような……身内が傷つくようなことが。

由梨の目の前で何かが起きたのだろうか。禮夜が知らないことが。

そうなのだとすれば、その記憶を思い起こしてしまったのだったら、血を見せるようなことをしなければよかったのかもしれない。

もしかしたら助けなくても大丈夫だったのかもしれない。庇う以外にも選択肢があったのではないだろうか。

しかし過去は変えられない。過ぎてしまったことはしょうがないのだ。

腕に冷たいものが当たる。いつの間にか雨が降ってきていたのだ。禮夜は思考を止め、速足で家へと向かった。

家に帰った時にはずぶ濡れになっていた。急いで自分の部屋に戻る途中、居間にある日本刀が目に入った。

禮夜の祖父、黒輝誠治朗くろきせいじろうが大切にしていた妖刀だ。禮夜はそれを少しの間眺めると、そのまま部屋に戻った。

日本刀を見た時に何故か心が騒いだのを禮夜は感じ取っていた。

06（前書き）

何だか今年の冬は暖かいですね。今のところは。

過ごしやすいと言えはそれまでですが、何だか調子が狂うような気がします。

次の日、いつものように学校に行くとなぜかみんなが騒がしかった。どうしてこんなに騒々しいのかと首を捻っていると、由梨がちょうど通りかかって、まるで昨日何事も無かったかのようにこっちに声を掛けてきた。

「おはよう。ねえ由梨、なんかあったの？」

「大変なの。河崎が昨日から行方不明だって…」

「行方不明？」

禮夜は思わず聞き返してしまった。

別に驚いたわけではない。ただ、あまりにもタイミングが良すぎる気がしたのだ。このタイミングだと昨日の騒動の後にいなくなったようにも思える。

何かあったのだろうか？

「うん。警察は昨日のこと知らないから昨日のこととは結び付けてないらしいけど…でもなんだかみんな昨日のことで河崎は居なくなっただんじやないかと思ってる。」

「まあ…普通はそう考えるよな。」

しかし禮夜にはそう思えなかった。河崎が自分でいなくなったとは思えないのだ。何か事件に巻き込まれた可能性が高い。

「とにかく学校中大騒ぎ。それと…今日は先生たちに何か言われる

かもしれない。横峰先生が昨日のことうまく言っといってくれたと思うけど……でも分からない。もしかしたらほかの……何も知らない人たちに何か言われるかもしれない。特に禮夜は……」

そう言つて由梨は下を向いた。氣にしていないうちに見せていても、やはり昨日のことを引きずっているのだろう。禮夜は少し笑つた後に由梨に話しかけた。

「大丈夫だよ。何を言われようとも、それは心を持たない言葉。ボクの心には響かない。」

「でも昨日私があんな騒動を起こしたから……」

「それは禁句。」

禮夜は言葉を選ぶようにしてから由梨に言つた。

「別にあれは由梨のせいじゃない。もともとボクがああの山にはいつたことから始まつたんだ。結局、自業自得だよ。」

その言葉を聞いて、由梨は禮夜を見た。さっきのような弱弱い視線ではなく、今度は禮夜を射抜くような視線だった。

「何で、禮夜は自分が傷つくことで他人を守ろうとするの？自分のことは大切じゃないの？」

禮夜は動きを止めた。そんな禮夜を、由梨は鋭い視線で見ている。それでも禮夜は身動き一つしなかった。

まるで禮夜の周りだけ時間が止まってしまったようだ。どれくらい時間が経つただろうか？由梨がもう一度口を開こうとす

ると、禮夜がやっと喋った。

「由梨。」

「…何？」

「……それも禁句だ。」

やっと禮夜が紡いだ言葉に由梨は声を上げた。

「何で？私は思ったことを言っただけ。何故それを聞くことがいけないの？」

ずっと目を合わせていなかった禮夜が、由梨の方を見た。禮夜の目を見て由梨はたじろいだ。冷たく光っている禮夜の目は、全てを怯えさせることのできる目だった。

刈る者の目。

まさにそれだった。

「まだ話す時ではない。」

禮夜はそう冷たく言い放つと、いつも通りの表情に戻り、笑った。

「じゃあ教室に行こうか。」

「あ、うん。」

禮夜と由梨は教室へと向かった。

「……話す時が来れば…だけだね。」

禮夜の呟きは、由梨には届かなかった。

四時間目が終わった後の昼休み、由梨と話していると、数人の女子生徒が二人の元へやってきた。全員気持ち悪いほどにやにやと笑っている。

何を言いに来たのかはすぐに分かった。

由梨がこっちを見て、どうすればいいかと目で訴えてきた。こういうのは無視するに限る。由梨にそう目で伝えると、由梨は頷いた。向こうは何も話しかけてこなかったため、禮夜達が無視して話し続けていると、しびれを切らしたのか向こうから不機嫌そうに話しかけてきた。

「ちょっと何無視してんの？」

禮夜はここではっきりと相手の顔を見た。そして由梨にもう一度目配せをすると、相手に話しかけた。

「何？こっちに用があったのか？何も言わないから分からなかったよ。」

禮夜がそう言うと、向こうは余計に機嫌を悪くした。

「ちょっと、そっちの立場分かってる訳？」

「立場とか関係ないんじゃないの？」

由梨がそう返すと、向こうは目配せをして二人の席の周りを囲んだ。

「何？ちよつと痛い目見ないと分からないの？」

そう言うのと、向こうの一人が由梨に向かって何かを投げた。

かなりの近距離だったため、普通の人間なら反応することはできなかったかもしれないが、禮夜と由梨はそこまで普通の女子生徒ではない。飛んできたものを自分の顔の前で受け止め、それが何なのかを確かめた。

「禮夜、これって…」

由梨に飛んできたものを見せられる。

「ああ、多分スタンガン。何でこんなもの持っているんだよ…」

そう、それはペンタイプのスタンガンだった。

今の時代、普通にネットに防犯グッズとして売っているが、この辺は比較的治安が良いため、スタンガンなんて必要のないものだ。しかも、それをよく見てみると、ほとんど使われていないことが分かった。多分新しく買ったのだろう。

「げ、電源入ってる。掴む場所によっては気絶するじゃん。」

そう言うって電源を切り、手で弄ぶ由梨。禮夜は、顔が引きつっている向こうを見据えた。

「何するつもりだったのかは知らないけど、もうちよつと後先考えた方がいいよ？…スタンガンは先生に渡すから。もう少しで授業始まるからさっさと自分の席に戻れ。」

有無を言わさぬ口調で命じると、案外素直に帰って行った。禮夜は

由梨からスタンガンを預かると、横峰の元に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8089x/>

儀式の夜

2011年11月20日00時04分発行